【卒業生寄稿】

ポルトガル語学科の後輩の皆様へ

駐モザンビーク特命全権大使　木村元
（1983 年卒業）

ポルトガル語学科の皆様、こんにちわ。私は 1977 年にポルトガル語学科に入学し、83 年に卒業して外務省に入り、以来人生のほとんどをブラジル関係で過ごしてきました。在外でブラジル以外に勤務したのはポルトガルとパラグアイだけです。ブラジルには合計すると 20 年以上勤務しましたので，半分ブラジル人になっているかもしれませんが，その分，ブラジル事情には少し自信があります。ハイパーインフレと巨額の対外債務に苦しんで何度も物価凍結を実施した頃から，BRICS と言われるようになった頃を通って，２年連続マイナス 3.5%成長の戦後最大の大不況まで，大きな歴史の波も実際に体験してきました。今は、バリバリの保守政権ですね。東京ではほぼ全て中南米局で勤務しました。外務省の地域局と言われる部署，つまり担当の国との関係を直接扱う部署ですが，ここにいるといつ何が起きるかわからず，かつ人の往来が多いので，年中バタバタしています。入省 2 年目のフィゲイレード大統領の訪日の際には毎日深夜まで働いていました。地域局は担当の国との外交関係の最前線で働くわけですから，大変ですがやり甲斐はあります。たまたま，私は通訳官に任命され，長い間通訳としても働いていましたので，文字通り最前線に立たされていました。例えば，首脳会談や外相会談の際に，話すのは総理であったり外務大臣であったりしますが，それを実際にポルトガル語または日本語に変えて先方に伝えるのは私でしたから，訳を間違えるとか訳せないとか，そのようなことは許されないのです。その意味でプレッシャーは大きかったですが，誰でもができる経験ではではないので，ああ，自分は最前線にいるなあという満足感がありました。天皇皇后両陛下やその他の皇室の方々の通訳もさせていただきましたが、この上ない光栄でした。このような経験は何物にも代えがたく，総領事になった時，ブラジルの友人から「総領事として働く上で，何が一番役に立っている？」と聞かれたとき，「ポルトガル語力だな。」と答えました。現場で交渉や情報収集をやるにはどうしたって語学力が必要です。上記の質問をした友人は，国際法の知識だな，とか，経済の知識だな，とかの答えを期待していたのだと思いますが，「何が一番役に立っているか」と聞かれて一つだけ選ぶとすれば，この答えになりました。私のポルトガル語力は，長年通訳として積み上げてきた経験のおかげでもあるのですが，やはり上智で学んだ基礎が役に立っているのだなと思っています。皆さんも頑張ってポルトガル語を勉強してください。私は、今度は南米を離れてアフリカに行きますが、やはり長年培ったポルトガル語力をフルに生かして、日本の国益のために働いて来たいと思っています。